

## 承認の政治における男性権力

### —モノガミーと性愛の植民地主義への基礎的考察—

池田 緑\*

#### 要 約

男性と女性の上に横たわる植民地主義において、女性は無償労働と次代再生産能力を収奪されている。その対価として、女性には他者承認が与えられるが、その承認は性的な承認か社会的承認であり、女性が求めている人格的承認ではない。その結果、女性たちは業績原理と女性原理の間で引き裂かれることになる。その一方で、《ファルス》による承認はメランコリーを通じて女性から自己決定を奪っている。その典型が「父の娘」や「父親喪失者」である。この状況を変えるには、性的承認、社会的承認、人格的承認の位置づけを再構成し、新たな性愛の手法と、尊敬を共有可能な人間関係の模索が必要である。

#### はじめに

人間は誰しも社会的生活を営んでいる。社会的生活を営んでいる以上、他者による承認は必要不可欠である。〈われわれ〉が〈われわれ〉であるのは、つねに社会的関係において他者から承認を与えられ、自己を確認しているからに他ならない。人間は社会的存在である以上、他者との関係性において自己を確認し、他者の視点を通じて自己を認識し、他者を鏡として自己像を形成する。しかしながら、われわれの社会が相互の他者承認によって成り立っているとしても、その承認の方式は多様であり、そこには権力がかかわっている。社会学や心理学はこのプロセスをつねに問題としてきたといえる。

承認をめぐる苦しみは、とくに女性にとって深刻である。男性が必要とし与えられる承認の

種類・方式と、女性のそれとの間に格差があるからだ。多くの女性はモノガミーと他者承認の狭間で苦しんでいる。それは承認をめぐる抑圧構造が、男性よりはるかに大きな問題として存在しているからだ。抑圧が存在するのならば、そこには必ず権力が存在している。すなわち、承認の問題とは権力の問題でもあるのだ。権力が存在するのならば、フーコー以降の権力論が明らかにしてきたように、そこには抑圧を行う側と受ける側との奇妙な共犯関係という、コロニアルな問題系が存在している可能性がある。すなわち、男女間の承認をめぐる政治は植民地主義の問題でもあるかもしれないのだ。

植民地主義は、なにも植民地においてのみ存在しているのではない。植民地主義とは、他者を資源化する心性であり、権力と抑圧の関係性の在りようを指し示す概念である<sup>1)</sup>。もちろんこの両性

\*大妻女子大学 社会情報学部

間の植民地主義において顕在化する資源は、女性の無償労働力と次代再生産能力であることは言を待たない。しかし問題はそのような唯物論的認識に留まらない。多くの植民地主義では、資源の収奪を可能とするために、精神や「魂」といった次元の抑圧と依存、権力による支配が貫徹されている。本稿では、両性間に存在する承認をめぐる政治とその権力性にかんして、基礎的な考察を行う。それは、女性の労働力と再生産能力が男性社会を支える基本的な資源として女性から収奪される過程で、承認と性愛が男性権力を維持するために活用されている構造を少しでも明確にし、その構造を変革する途を探る第一歩となるからである。

## 1. 承認をめぐる政治

娼婦になりたいと思ったことのある女は、大勢いるはずだ。自分に商品価値があるのなら、せめて高いうちに売って金を儲けたいと考える者。性なんてなんの意味もないのだということ、自分の肉体で確かめたい者。自分なんかちっぽけでつまらない存在だと卑下するあまり、男の役に立つことで自己を確認したいと思う者。荒々しい自己破壊衝動に駆られる者。あるいは、人助けの精神。その理由は女の数だけ存在するのだろう 一桐野夏生『グロテスク』

小倉千加子は、ジェンダー・カテゴリーにおける女性の特徴を以下の7つに分類している（小倉，2001：22）。

- ①直接自分の要求を出すことを抑圧され、自立したいという願望をどこかで抑制しており、その結果男性的な領域で成功していても、自己不全感をまぬがれない。
- ②他人の世話をしたり、他人の要求に応えたりする性別（母親）に同一化するため、自分の面倒を見てもらいたいという養育欲求は挫かれ、自分の欲求に確信を持たず、とくに男性に対して自己主張することが難しい。
- ③自己肯定感が男性より低く、自尊感情も男性より低い。
- ④第二次性徴や妊娠・授乳期における身体の変化が男性よりも劇的で、そのことで身体感覚が男性よりも敏感であるにもかかわらず、身体を「客体化」することを要請されるので、快楽も攻撃性も自他の身体に直接向けることを抑制され、買春・殺人・自殺をする率が男性より低い。
- ⑤自分自身への不安は、自分の身体への不安と置き換えられる。
- ⑥母娘関係における緊張や両価的感情は、思春期を過ぎてても少しも良くならない。
- ⑦母親が息子より娘に同一化してしまう傾向が強いため、母親との分離が男性よりも難しく、「分離不安」が男性よりも強い。

小倉も指摘していることだが、これらはいずれも生物学的性差は関与していない事柄、すなわちジェンダー領域の問題であり、社会的に構築されたものである。さらに、これらの特徴は女性が男性に比べて承認不全・未達成感を感じやすくなる源泉となっていることがわかるだろう。

すなわち、女性の他者承認への渴望は社会的に構築されたものであることになる。上記の特徴にみられるように、女性がジェンダーを内面化する過程において、未達成感、自己評価の低さ、自尊感情の欠如、といった他者への依存を誘発する要因が埋め込まれるのだ。その結果、多くの女性はそのままの自分を、自分だけの基準で愛することができなくなる。なぜなら、評価基準は男性が独占しており、また周囲の男性から「女性である」という根源的（ラディカル）な理由で価値のない存在として扱われることが常態となっているからである。

女性がこのような未達成感を克服する方法は2つある。1つは美の領域において賞賛を受け自己の価値を回復する途である。小倉千加子は近代の恋愛・婚姻制度は「カネとカオの交換」として喝破したが（小倉，2007：32）、男性が経済力に代表される社会的価値を資源とするのに対し、女

性にはもっぱら「美」が資源として求められ、そして「美」のみが賞賛に値する女性の資源として扱われてきたのである。

この点は重要である。実際に資源として女性から収奪されるのは労働力と再生産能力である。にもかかわらず、女性の側が援用可能な資源は「美」にほぼ限定されるという不均衡な構造が存在している。この構造は、男性間のホモソーシャルな競合に起因していると考えられる。ホモソーシャルリティ (Homo-Sociality) とは、イヴ・セジウィックが提唱した概念で、男性同士の社会的関係を安定させるため、同性愛的要素 (ホモセクシュアリティ) を慎重に排除し、女性を性的存在として、欲望の対象として外部化し、その欲望を男性同士が共有することを表明しあうことで成り立っている男性の社会的関係を指す (Sedgwick, 1985=2001)。そこでは、同性愛タブーとミソジニー (女性嫌悪) の共有が前提となる。

ホモソーシャルな欲望において、女性は性的存在として他者化され、資源として男性たちによって競合される対象となる。そのため女性の価値は「美」という男性のホモソーシャルな競合関係において計測可能な基準によって与えられてきたのである。ホモソーシャルな異性愛男性たちは「好みの女性のタイプ」を語り合い、同性愛の禁忌とミソジニーを確認しあっているが、その「好み」が、顔や体型において驚くほど画一的なのは、ホモソーシャルな女性獲得競争関係が、彼らに共有されたコードとしての「美」という単一の基準によって展開されているからである。すなわち、女性が「美」によって得られる達成感、男性たちのホモソーシャルな競合関係なくしては成り立たないのである。そしてそのような構造が成り立つのは、男性が社会的な権力と富を独占しているからにほかならない。

女性が未達成感を克服する2つ目の方法は、愛 (性愛) の獲得である。自尊感情が低く、自分をそのままでは愛せない女性は、誰かに愛されることによって自己の価値と尊厳を確認しようとする。他者承認 (他者による承認) である。男性社会において嫌悪すべきものとされる女性性を具現

化した女性は、そのままでは自分を愛せない。したがって自分に価値を与え救い出してくれる「王子様」か、嫌いな自分を破壊してくれる「英雄」のいずれかを待ち望むことになる。しかもその「誰か」は社会的な価値決定権を保持している男性でなくてはならない。

つまり、女性の目の前に示されている自己回復の回路はほぼ1つである。「美」によって男性に選ばれ、次に性愛によって自己の価値を確認するというものである。したがって、多くの女性にとって性愛はきわめて重要な意味を持つ。男と性的関係を結ぶことによって、自己の世界を変革しようとし、性交だけが世界を手に入れる手段 (桐野, 2006b: 424) となるのである。女性は、自分の定義を階級上位者である男性に保証してもらわなければ安心できず、そのもっとも安易で親密な自己定義が性行為である (小倉, 2001: 10)。これは階級と権力による圧倒的な承認であり、多くの女性が女友達からの承認では満足せず、男性に承認 (性的承認) を求める理由はここにある。

そして、この承認システムを制度化したものが婚姻である。一部の社会を除いて、婚姻はモノガミー (単婚) を前提としている。なお、モノガミーは狭義においては婚姻制度の様態を指す言葉であるが、本稿においては、対の関係こそ理想であり、一对のカップルにおいてのみ性と愛が一致すべきであるとのロマンティック・ラブ・イデオロギーを内包した行動様式や考え方を指すものとして使用したい<sup>2)</sup>。

婚姻が恋愛結婚の形態をとるにおよんで、このモノガミーにおける他者承認の意味は強まっている。すなわち「一生チヤホヤしてくれる人を、一人は確保する」という幻想である。「少なくとも一人の男に承認されている女」というポジションは、女性が社会的な承認を得るほぼ唯一の方法であった。と同時に、女性同士の情緒的連帯を妨げる大きな要因にもなってきた。藤本由香里は「売春が割に合わない理由は何か」という問いを立て、それは特定の男性から選ばれる可能性やモノガミーの可能性、特定の男性から選ばれたことに

よって得られる社会的尊厳を失う危険性が大きいからだ論じている(藤本, 1999: 26-32)。すなわち、売春とは社会的尊厳を売る行為であり、その尊厳は男性から選ばれることを源泉とするとの論旨である。この社会には一人の男性による性的承認こそが、女性の尊厳と自己回復の源泉とならざるを得ない秩序の構造が存在しているのだ。

しかしながら、このような承認獲得方法は根本的な矛盾をはらんでいる。女性にとって資源の基準となる「美」は、永遠のものではないからである。経年によって「美」が失われてゆくとき、女性たちに残されているのは無償労働力の提供と次代再生産の義務のみである。その結果、長期的にみれば、男性はモノガミーのシステムによって女性に比べてより多くのものを受け取る。このようにして、モノガミーを介在した収奪のシステム、「性の植民地主義」は完遂されるのだ。

小倉千加子は「性と思っているところにあるのが愛なんです。愛と思っているところには何も無い。—(中略)—相手の肉体も精神も、瞬間的に収奪すること。それが愛なんです」と述べているが(上野, 小倉, 富岡, 1992: 386)、これは多くの女性が錯誤している性愛の位置づけを的確に表現した発言である。性愛の発動主体は男性であり、それを受け入れることが「女の性愛」とされる性規範の下では、多くの女性は愛の名の下に肉体と精神を徹底的に収奪される。圧倒的な承認と思われているものは、実際には圧倒的な収奪なのだ。他者承認を求めることによって、女性は女性であることを理由に裁かれる。裁きの基準は「美」であり、裁きの場はベッドの中である。下される判決は無償労働力の提供と再生産の義務である。そして裁判官はホモソーシャルな男性社会およびそこに属する男性個人なのだ。

## 2. 他者承認の隘路

### 2-1. 承認の類型

ここまで男女間の他者承認における、性愛の回路を中心に考えてきたが、ここで男女間における

他者承認の中容についても検討が必要だろう<sup>3)</sup>。人が他者から受け取る承認には、大きく分けて3つの種類があるといっていだらう。すなわち、「社会的承認」、「人格的承認」、「性的承認」である。

「社会的承認」は文字通り共同体による承認で、社会的地位、職業的威信、人々による尊敬、あるいはそれらを反映した収入、それによって得られる自尊感情、といったことによって満たされる承認感覚である。「人格的承認」は社会的承認と深く結びついている場合が多いものの、社会的地位や威信を離れて、全面的に人格を他者に受け入れられること、パーソナリティに対する他者からの肯定的な評価や視線、他者からの人格的尊厳の尊重やそれによって得られる自尊感情、等によって構成される承認感覚である。最後の「性的承認」は、人格的承認と深い関係にあるが、基本的には生殖行為にかかわる自尊的感情として得られるものである。これらの承認は、いうまでもなく「社会的自己実現」、「人格的自己実現」、「性的自己実現」のそれぞれの欲求に対応したものである。

そして問題は、このような承認のやり取りの方式が、男女によって異なっていることである。男性の場合、比較的に人格的承認と性的承認の距離は近いものの、基本的にはこの3つは独立しており、同時に代替可能である。社会的承認は業績原理における競争に勝てば得られる。そして男性の場合、人格的承認は社会的承認と別個のものとして存在しうる。たとえば、金や地位は少なくとも優しくて周囲から尊敬されている人。極端な例を挙げれば、浄土系仏教の宗教的生活における「妙好人(みょうこうにん)」のように「周囲の尊敬を集める世捨て人」のような存在が可能である。そしてもちろん、多くの社会的文脈において社会的承認と人格的承認は代替可能でもある。

一方で性的承認は、男性の場合には人格的承認ときわめて密接に存在している。狭義の性的承認、すなわち性行為の遂行可能性は、性と人格が結び付けられ、多くの中老年男性を悩ませる問題であることは、近年の「バイアグラ騒動」を想起すれ

ば理解できるだろう。この性が人格と結びつく回路は、いうまでもなくホモソーシャルな男性社会のロジックに起因している。すなわち、つねに相互に女性を性的対象としていることを表明しあわなくてはならないホモソーシャルな男性間の関係においては、性的能力の低下はその基盤を揺るがしかねない事態で、社会的かつ人格的な自己実現を危険にさらす事態となりうるからである。しかしながら、そのように性的自己実現が社会的自己実現とリンクしていることが、逆に代替可能性をうんでもきた。

たとえば老齢の権力者が自らは性的に不能であっても、若い愛人を囲い自慰行為をさせてその様子を見て楽しむ、といったプロットは男性文学のなかで頻繁にみられるものである。社会的自己実現（たとえば権力や金銭）の担保によって、性的能力の有無にかかわらずセクシュアリティが異性愛であることを表明・自己確認できる限りにおいては、異性愛男性にとって性的承認は充分に得られるし、ホモソーシャルリティを基盤とした社会的・人格的自己実現が揺らぐこともないのである。

また性的承認を広義の意味に捉え、性的行動への可能性、すなわち容姿等によって女性に選ばれる可能性まで含めた問題とした場合、社会的承認との代替可能性はさらに上がる。そもそも、前述のように、近代社会の恋愛・結婚はカネとカオの交換であったわけであるから、社会的承認（カネ）さえあれば、よほどのことがない限り性的承認は得られるのである。

ところが女性の場合、事情は一変する。多くの女性に与えられる他者承認は一通りしかない。それは性的承認である。なぜなら「1」において述べたように、男性が女性に承認を与える回路は性的なものに集約されているからである。女性から見た場合、社会的承認も、人格的承認も、性的承認も、すべて一緒に、混在してやってきがちとなる。それらは性的な回路を通じて受け取ることになる。その意味において、男性の場合のような他者承認における3つの種類の相互独立性は、ほとんど期待できない。

しかもこの場合、人格的承認はほとんど与えられない。多くの恋愛・結婚関係が「カネ-カオ交換」である以上、「美」に磨きをかけ男に選ばれたとしても、「カオ」の代償として得られるのは「カネ」なのである。すなわち「カネ」や社会的地位に象徴される社会的承認のみである。前述した藤本由香里の指摘にもあったように、女性が男性から得られる最大かつ唯一の承認は「選ばれた」ということと、そのような競合関係をうんでいるホモソーシャルな権力を担保として発動された「選ばれた女の尊厳」のみである。

換言すれば、女性にとって社会的承認と性的承認はつねにワンセットであり、人格的承認は、きわめて稀にしか（おそらく男性の気まぐれによってしか）与えられない、ということである。多くの主婦たちの未達成感、人として認められていないという不満、かつてベティ・フリーダンが「名前のない問題」(Friedan, 1963=1965)と名づけた女性たちの人格未承認の問題は、この構造に起因している。そしてそのような承認行為は、性的回路を使用してのみ、遂行されているのである。

吉澤夏子は、恋愛に際して「戦略的女の子」と「存在的女の子」の2つの理念型が存在すると指摘している。「戦略的女の子」とは、恋愛をゲームと割り切り、そのなかで最高点ではなく「楽しんで得する」ために無難なハイスコアを狙うタイプで、女性に求められている「かわいい」などの「物差し」を内面化して、結果的に男性から見て没個性で代替可能な存在となってゆくという。一方、「存在的女の子」は自分の個性を育むが、恋愛ゲーム（恋愛と呼ばれているもののほとんどが該当）を恋愛（それはほとんど存在していない）と勘違いし、男性の喜ぶ女の子のコードから外れてしまったりと、つらい経験を重ねがちになる。というものである。これらはあくまでも理念型であり、現実にはその双方を一人の「女の子」は内包しているという（吉澤, 1993: 205-210）<sup>4)</sup>。

この吉澤の理念型を他者承認と自己実現の文脈に置き換えて考えれば、「戦略的女の子」は性的回路を通じた社会的承認（社会的自己実現）の獲

得を目指し、あるいはその獲得でよしとするタイプで、一方「存在的女の子」は人格的承認（人格的自己実現）の獲得を目指すタイプ、といえるだろう。人格的承認（を通じた自己実現）が、恋愛や結婚によってほとんど供給されえない以上、彼女らが「つらい経験を重ね」るのは理の当然であるといえる。

## 2-2. 2つの原理

1980年代以降、女性の社会進出が進むにつれ、女性たちの自己実現の手法も多様化したように、みえた。それは男性に選ばれるという性的承認に付随した社会的承認ではなく、自らが業績原理によって、共同体や社会から直接に社会的承認を得るという戦略が誕生したようにみえたからである。

しかしこの業績原理による社会的承認の獲得は、期待されていたようには進まなかった。男女共同参画社会といわれて久しいが、いまだに女性への資源分配と無償労働負担の偏りは是正されていない<sup>5)</sup>。女性の大学進学率も上がり、総合職として働く女性も増えたが、男性に伍して働くことに疲れ主婦になるという選択をする女性も少なくない。また、多くの社会的には地位があり高収入の女性が、男性に選ばれないことを苦にしていることも事実である。社会的承認は与えられても、人格的承認は与えられないからである。多くの女性たちが真に求めているのは人格的承認、あるいは人格的承認と社会的承認の双方であることが推察できる。

このような新たな時代の女性の悩みを鋭く抉った文学作品として、桐野夏生の『グロテスク』を挙げることができる（桐野、2006a; b）。『グロテスク』は2001年から2002年にかけて『文藝春秋』誌上に連載され、いわゆる「東電OL殺人事件」にヒントを得た作品として知られている。

「東電OL事件」とは、1997年に当時39歳の東京電力に勤務する女性が、東京都渋谷区円山町で殺害された事件である。彼女は、昼間は総合職として働く一方、夜は渋谷のホテル街で売春行為を行っており、その生活様態が世の関心を喚起し、

また容疑者として逮捕されたネパール人男性が冤罪の可能性も指摘されたことも相まって、世の注目を集めた事件である。この事件を扱った書籍も多数出版された。

『グロテスク』は主に4人の女性の物語として進行する。まずスイス人の父と日本人の母を持ち、区役所に勤務する40歳を目前にした「わたし」。「わたし」の妹で、たぐい稀なる美貌を持ち、最後は娼婦となり殺された「ユリコ」。優等生で医学部に進学するも、オウム真理教を髣髴とさせるカルト宗教集団に入信し殺人を犯してしまった「ミツル」。最後に、東電OLをモデルにしたと思われる、努力型で要領が悪く独善的で、大手建設会社に総合職として入社し経済学の論文で賞を取るなどの活躍をしつつも、最後は娼婦となって渋谷のアパートで殺された「和恵」。そして4人ともが慶應女子高がモデルと思われる「Q女子高」の出身という設定である<sup>6)</sup>。

いうまでもなく『グロテスク』はフィクションであるが、ある種のリアリティをもって読む者の心を打つ小説である。そのリアリティは、4人の主要登場人物の物語が「他者承認をめぐる問題」として構成されている点にある。問題という言葉は生易しすぎるかもしれない。とくに終盤に登場する「和恵の日記」の壮絶さは、「承認戦争」あるいは「承認戦」という言葉がふさわしいくらいである。またこの4人の人物は、すべて現実に生きる女性たちの分身であるともいえる。私の周囲には「4人の登場人物すべてが私のなかにいる」と語る女性も少なくない。

その4人の承認戦争は、業績原理と女性原理の間で戦われている。たとえばミツルは、業績原理を信じて東大医学部に進学するが、そこで自分の能力の限界を悟り、自分より能力の高い配偶者を得るという女性戦略に転ずる。しかし、やがて夫婦そろってカルト教団に入信し、その教団内部においても業績原理が存在し、しかも既得権益化して幹部たちに特権化された序列をみて愕然とする。一方「わたし」は、男性による他者承認によって自らが変化することを恐れて処女を守る。「わたし」は悪意で武装し男性社会の侵入を拒み続け

る。最後の場面を除いて、「わたし」は自らの変化が必要なきときには、必ず逃亡する。男性社会の暴力性が怖いのである。妹のユリコはニンフォマニアを自認し「私は相手がどんなに粗暴な男でも、醜くても、あの瞬間だけは好きになることができるし、あらゆる恥ずかしい要求にも応えられる—（中略）—相手に応えられるという自分の能力を存分に実感できるからだ」（桐野，2006a：232）と語るほどに、男性の承認に依存した存在である。これらの思考／指向は、程度の差こそあれ、多くの女性に共有されているものだろう。なかでも、東電OLをモデルとした和恵は、男性社会の業績原理秩序において乗り越えられない性差の壁があるとわかった時から、過剰なまでに男性の視線による性的承認を求めはじめる。その結果、彼女は娼婦として渋谷の街角に立つまでになる。和恵は業績原理と女性原理に引き裂かれた存在として描かれている。

これら4人の登場人物は、全員が例外なく「痛い」存在である。しかし『グロテスク』が提起しているものは、すべての女性は「痛く」ならざるを得ないという現実。かわいらしい妖精のような女が、グロテスクな妖怪に変化せざるを得ないという、恐ろしい現実である。

ところで、和恵と同期入社で寿退社した東大出身の山本という登場人物がいる。和恵と山本は総合職女性の第一期であるにもかかわらず、入社当初から競合させられていた。ふと結婚したいと漏らした山本は、和恵に対して以下のように語る。

あたしは虚しいのよ。あたしたちに担わされているものって重過ぎるんだもの。男以上に働いて、女の仕事もして、両方に気を遣ってくたびれて。だけど男にはなれないのよ。

—（中略）—

頑張りたくなくなっちゃった。だって最初から負け戦なんだもの。会社って、あたしたちを試しているだけって感じがする。試されるだけって屈辱じゃない。

（桐野，2006b：267-268）

この山本という登場人物は完全な脇役で登場場面も少ないが、男女雇用機会均等法施行以後の女性のおかれている立場、とくに社会的承認における矛盾を的確に語っている。その矛盾は知恵においてより強烈に立ち現われている。

①勝ちたい。勝ちたい。勝ちたい。

一番になりたい。尊敬されたい。

誰からも一目置かれる存在になりたい。

凄い社員だ、佐藤さんを入れてよかった、と言われたい。

②誰か声をかけて。あたしを誘ってください。お願いだから、あたしに優しい言葉をかけてください。

綺麗だと言って、可愛いって言って。

お茶でも飲まないかって囁いて。

今度、二人きりで会いませんかって誘って。

③勝ちたい、勝ちたい、勝ちたい、一番になりたい。

いい女だ、あの女と知り合ってよかった、と言われたい。

（桐野，2006b：263；275；277-278）

この3つの文章は、和恵の日記において、日を置いて太字で書かれている部分である。和恵が他者承認に飢えた末、痛ましいほどに自己を支えようとギリギリの戦いを行っていることがよく表現された部分である。①は入社直後のコンパの席でコネ入社といわれた直後の記述である。この時点では社会的承認を満たされないことへの渴望が綴られている。②は業績原理のガラスの天井を思い知らされ、仕事を通じた社会的承認をあきらめ、性的承認を求め始めた時期の記述である。③は②と同じ日の記述であるが、「あの女と知り合ってよかった、と言われたい」という記述によって、「カネーカオ交換」による性的・社会的承認ではなく、和恵が真に求めていたものは人格的承認であったことが明らかになる箇所である。

業績原理で運命付けられている「負け戦」。そ

れは社会的承認の自己獲得の不可能性を示している。そして女性原理によっては与えられない人格的承認。この隘路から逃れられるのは、業績原理から女性原理に転換しても、そこで勝者となれる「美」を資源として保持している女性のみである。そのようにして女性は性的承認を中心とした女性戦略（女性原理）へと追い立てられ、回収される。しかもその戦略転換が成功したとしても、それはホモソーシャルな男性社会からの「裁き」を受け入れたことに過ぎず、その代償として無償労働力と再生産の義務を負わされ、やはり人格的承認は与えられない。なぜ女性のみが、この煉獄のような苦しみを味わう必要があるのか。『グロテスク』はこの理不尽な状況を、登場人物のグロテスクさを通して、彼女らをグロテスクな妖怪に仕立て上げた男性社会の権力とグロテスクさを告発している。この隘路は、すべて男性の利益確保のために導かれたもの、「性による植民地主義」の帰結にすぎないのだから。

### 3. 人格的承認をめぐる闘争

#### 3-1. メランコリーという戦場

はたして、この世の中に女性として生まれた者が、人格的承認を求め、さらには人格的自己実現を希求することは「分不相応」な大それた企みなのだろうか。もちろんその問いへの答えはNOでなくてはならない。男性が得られているものを、生まれによって構造的に得られないのであれば、それは差別であるからだ。

その議論の前に、女性において人格的承認が絶対的に必要な理由を確認しておくことが重要である。そのためには、精神分析学の知見を導入する必要がある。

有名なフロイトのエディプス・コンプレックスという概念がある。フロイトによると、幼児が母子癒着の段階から脱却するとき、母への愛情（近親姦タブー）を父親による禁止の法、すなわち去勢の脅迫（去勢不安）によって断念する。男児の場合はその喪失を父親に同一化することで克服し、さらに母に似た誰か（女性）を愛することに

よって克服し、男性としてのアイデンティティを確立する。一方で女兒の場合は、禁止の法の象徴であるペニスを持たない母への不信とペニスを有する父への憧憬（ペニス羨望）によって愛情を父親へと遷移させ、父の子（男性の子供）を孕むことによって母親の性（女性）と同一化する、とのことである。後にこのフロイトのエディプス構造は男性中心主義であるとの批判を浴び、たとえばクラインらの「対象関係論」をうみ出すこととなった<sup>7)</sup>。

ところでフロイトは、愛する対象の喪失の結果としてメランコリーという概念を提起している。フロイトは、深い喪失の場合、自分が何を喪失したのかが特定できない状態（＝メランコリー）に陥ると説く。そしてその対象を忘却すると同時に、その解決策として喪失した対象を自己のなかに取り込み、それに成り代わろうとすると述べた。

このフロイトのメランコリー概念を批判的に読み替えたのがジュディス・バトラーである。バトラーによれば、母子癒着からの脱却過程において、母の喪失によりメランコリーに陥った娘は、深い喪失を解決しようとして、かつて母を愛したことを忘れようとする。それは同時に母親を自分に取り込む作業であり、その性（女性）に自らを同一化しようとする、と論じた（Butler, 1990 = 1999: 56-65）。すなわち、母の喪失によるメランコリーの極限において、娘は「娘」であることをやめて「女」になろうとする、なぜなら私は女であり、母であるからだ、との同一化が達成されるという議論である（竹村, 2002: 177）。女性につきまとう未達成感の根源、人格的承認を求めてやまない渴望の根源には、この母の喪失が他のものによって埋められず、空洞のように残っていることが、一つの理由として考えられる。

フロイトの議論を批判的に発展させたラカンによれば、このような空洞は生物学的なペニスといった具体的な身体器官ではなく、言語化された父性（もしくは家父長性）によって埋められる。それをラカンは「父の法」とよび、のちに「ファルス（象徴的・言語的な意味でのペニス）」と名

づけたことは有名である<sup>8)</sup>。

多くの女性はメランコリーを抱えながらも、バトラーが指摘するように「母の性」を取り込んで内面化することで「女」になってゆく。しかし、なかにはこの過程をうまく接合できていないのではないかと思われる人々もいる。それは「父の娘」という呼び名で知られている特徴を持った女性たちである。

「父の娘」とは、あたかも父親に男児のように育てられ、父親が代表する社会的価値観と家父長制を内面化して育ち、業績原理での競争にも意欲的で、その結果として大学卒など高学歴者も多く、家庭内においても父親の価値観を内面化し、父親が接するように母や姉妹に接する（あるいは父親の視線を内包化した）娘のことである<sup>9)</sup>。先に紹介した『グロテスク』に登場する和恵も、典型的な「父の娘」であった。和恵の父親は教育熱心だが俗物で、世間の価値観を体現化しており、業績原理での娘の出世を願い、娘の恋愛も勉学の妨げになると邪魔をするような父親として描かれていた。和恵はそのような父を尊敬し、母や妹を軽蔑し、ギリシャ神話に登場するエレクトラのように家父長制の体現者となり、父の期待に応えようと一流大学出身の女性総合職として業績原理での成功者を目指したのであった。和恵は父（＝男性社会の価値観）を内面化した女性として社会に出ていったのである。

このような親密な父娘関係は、ある意味では擬似的な恋愛感情を伴ったものであるともいえる。それは理論的には当然のこととされており、フロイトも娘から父への恋愛感情は「小さな一人の女」の誕生であるとし、むしろ「正常な発達」であるとする。父娘間のタブーは、近親姦のタブーとしては「母－息子関係」ほどには重要視されていないという（竹村、2002：169）。しかしより重要な問題は、このような「父の娘」は、きわめて男性中心的な価値観を制度的に補強する存在として男性に活用されるという点である。

女が《ファルス》で「ある」ことは、《ファルス》の力を反映し、《ファルス》の力を意

味づけ、《ファルス》を「具象化」し、《ファルス》が貫く場を供給していることである。—（中略）—ラカンが、《ファルス》をもたない〈他者〉は《ファルス》である者とまず述べておいて、次に、権力というのは、〈もたない〉というこの女の位置によってふるわれるものであり、《ファルス》を「もつ」男の主体は、この〈他者〉に対して、《ファルス》を追認せよ、そしてそれによって「拡大的な」意味で《ファルス》になれと命じているのだと述べている。

（Butler, 1990 = 1999 : 92, 傍点原文）

ラカンをひいたバトラーのこの見解は、「父の娘」の存在様態にそのまま当てはまる。「父の娘」とは、「父」に代表される《ファルス》を持たざる者であり、同時に欲望する者であり、それを形成し、支える者である。すなわち男に備わっていると思われる《ファルス》、すなわちペニスの存在を象徴とした男性権力を作り出しているのは、たとえば「父の娘」に代表される女であり、その意味では、女そのものが《ファルス》で「ある」ということになる。そのように考えれば、「父の娘」のような存在こそ、もっとも《ファルス》的な序列制度、すなわち父権を生産する権力装置であるということになる。

視点を変えて考えれば、このような「父の娘」たちは、「父」に何を求めているのであろうか。それは言うまでもなく《ファルス》である。《ファルス》を持つ者、すなわち男による承認。それも、性的、人格的、社会的、のすべてにわたる全面的承認である。それは、男たちが人格的、社会的自己承認を獲得する過程でエディプス構造を乗り越えるのに対し、その構造に加えて近親姦の欲望すら〈父の娘〉においては存在しうるからである。

ところで、このような「父の娘」が、もし「父」を失ったらどうなるのであろうか。実際のところ、「父の娘」の中には、父親喪失者が少なくはない。ここでいう「喪失」とは、身体的な喪失（死去）に加え、両親の離婚、あるいは父親の権威の喪失（たとえば母親に対して行っているDVを目

撃、浮気の発覚等)においても、承認を与えてくれるべき父親(像)が崩壊してしまったケースも含む。

その場合、事態は深刻となる。このような「娘」にとってみれば、抱えなくてはならないメランコリーは二重となるからだ。第1に母親を喪失したことによるメランコリー。第2に父親に向かった愛情が遂行不可能になる事態、つまり承認主体である父親を喪失したことによるメランコリー。もっとも、父親喪失は母親の場合ほどの極端なメランコリーを生産することはないだろうが、中途半端なメランコリーは十分に生産される。しかも、失ったものが父親(像) = 《ファルス》であることを自覚している「娘」はほとんどいないであろうから、実質的には2つのメランコリーは同時に、重なって起こりうるのである。このようなケースを便宜的に「父親喪失者」と名づけた<sup>10)</sup>。

### 3-2. 「父親喪失者」のクライシス

このような「父親喪失者」は、二重のメランコリーに引き裂かれた存在である。自己が何者であるのか、その基盤を二重の意味で喪失せざるを得ないからである。母への愛の忘却の際、娘の自律は母を殺さないことではなく、母を忘れたこと、すなわち母への愛を殺したことであった(竹村, 2002: 179-180)。それは娘における緩慢なる自殺と同義である。

しかし「父親喪失者」の場合、「母への愛の忘却」と「父への愛の忘却」という二重の自殺が行われてしまう。そしてメランコリーの解決策として、父親 = 父権 = 《ファルス》を強烈に内部に取り込まざるを得なくなる。すなわち「父親喪失者」は同時にもっとも純化された「父の娘」であり、同時に《ファルス》にもっとも馴化された存在となる可能性がある。しかし彼女の欲望は、彼女が女性というセックスを持っている限り、現在の社会では達成不可能な目標である。しかも彼女は母への愛もすでに喪失しているので、承認を与えてくれる主体をどこにも見出すことができない。彼女は、二重のメランコリーを克服するため

に、母を内面化し同一化し、同時に父をも内面化し同一化しなくてはならなくなる。それは、父権の《ファルス》が女性によって支えられている社会においては、論理的にも構造的にも達成不可能なプロジェクトである。

その結果、「父親喪失者」は何者にも同一化できない、何者にも「なる」ことができないという事態に陥ってしまう。彼女は引き裂かれ、自身を空洞として空け渡すよりほかに途がなくなる。空け渡す相手は制度であり、法であり、《ファルス》であり、男性である。彼女の空洞は制度や法や《ファルス》や男性に侵入され、それを防ぐ手立てもない状況に追い込まれ、彼女の身体と精神は“空洞の戦場”と化してしまう可能性がある。その結果、生きる意味と目的を見出せず、自分の存在に意味を与えることが困難となり、緩慢なる自殺は続き、ときには本当の死を迎えることにもなりかねない。そういえば『グロテスク』の4人の登場人物も、全員が「父親喪失者」であった(和恵は死別、他の3人は両親の離婚)。『グロテスク』は「父親喪失者」の物語でもあったのだ。彼女らの空洞、未達成感、承認への渴望、凄惨な戦場は、この二重の喪失、二重のメランコリーに遠因を求められるだろう。

そこにあるのは「愛」の徹底的な不在である。父でも母でもない自己を確立したくとも、人格的承認をもっとも求めている女性であるにもかかわらず、ホモソーシャルな男性社会からは性の回路を通じた社会的承認しか与えられない。それが彼女らの苦しみの最も根源的な部分である。彼女らは他者という鏡に映る自らの空洞しか愛すべきものを獲得できないのだ。

また、たとえ「父親喪失者」が男性と性的交渉を持っても、そこで承認されるのは、自らの「美」と交換した社会的承認のみである(カネーカオ交換であるから)。彼女らが求めてやまない人格的承認は受け取れない。彼女らにとって男性はすべて「擬似パパ」である。そして男性たちは単なる鏡の役割を超えることはない。そこに映っているのは、かつて自分が同一化しようと企てた自らの《ファルス》の残像に過ぎないのだから。

そして鏡を求めるのならば、へたな個性など持ちあわせていない操作可能な相手のほうがよい。その結果「父親喪失者」たちは、世の中の男性規範に忠実な男性に接近しがちとなるだろう。しかしながら真に求めているのは、そのような男性たちからはもっとも得られにくい人格的承認であるため、頻繁に相手を変えたり、複数のモノガミー関係を構築したりすることもあるだろう<sup>11)</sup>。

あるいは、父の喪失に対してより自覚的な者は不倫という形で、より強力な「擬似パパ=鏡」を獲得するかもしれない。「父親喪失者」が不倫という行為に向かうのは、不倫が禁断の甘い蜜をもっているから、などではない。相手の男性が既婚者であるという一点の理由に尽きる。既婚者である男性が、父権と《ファルス》を代表する者であるかのように錯覚してしまい、彼に人格的承認を求めてしまうのである。そしてそれは、擬似的近親姦の感覚を伴うこととなる。

しかしながらこの方法は、論理的にも必ず失敗せざるを得ない。1つは不倫関係において既婚男性は、婚姻関係を維持した「不倫」である以上、必ず言葉と行動に矛盾をきたさざるを得ず、そのことが相手から「父親=《ファルス》の代表者」たる地位を奪うからである<sup>12)</sup>。しかも、既婚男性は一般的な恋愛関係（カネ-カオ交換）しか構築しないわけであるから、あくまでも性的承認とセットになった社会的承認しか与えることができない。さらに彼らは自らのホモソーシャルな特権を手放す必要もない。不倫を行う既婚男性は、ホモソーシャルな男性間における競合のために「不倫」行為を行うのであり、その意味で相手の女性はホモソーシャルな関係において外部化された「性的な記号」にすぎないからだ。すなわち本田透の表現を借りれば、「男は不倫の相手にする女なんて肉壺ぐらいにしか考えていない」（本田，2005：370）という状況であり、逆に「肉壺」としか見ていないからこそ、そのような関係を結ぶのである。「父親喪失者」は、そのような関係性からは逆立ちをしても、少なくとも人格的承認だけは絶対に導けない。そもそも「不倫」とは相手の女性を人間として見ないことによって成立

している関係だからである。

さらに根源的な失敗の理由は、そもそも相手の男性は鏡であり、その鏡に映っているものは、自分が獲得し損なった《ファルス》そのものであり、その像は必ず生身の相手と齟齬をきたさざるを得ないからである。いずれにしても、人格的承認は、必然的に、絶対に得られない。

その結果、相手が「男性規範に忠実な男性」であれ、不倫相手であれ、これらの意味で、彼女らの性体験はつねにマスターベーション以外のものではありえなくなる。これは比喩ではなく字義通りの意味である。それは同時に、ペニスを特権化した《ファルス》中心的=男根ロゴス中心的（ファロゴサントリック）な性行動となる。具体的器官であるペニスへの欲望は、いうまでもなく、彼女が獲得したいと渴望してきた《ファルス》への欲望の代替物である。「父親喪失者」は男のペニスを使って、自分が獲得に失敗した自分自身の《ファルス》と寝ざるをえなくなる。

しかし、このような「父親喪失者」はホモソーシャルな男性社会とその構成員からみた場合に、もっとも都合のよい存在でもある。「男性規範に忠実な男性」や既婚者（不倫相手）といった男性たち（彼らはもっとも素朴かつ強固にモノガミーとそれを発動するホモソーシャルリティを代弁している）にとって、彼ら自身の《ファルス》を「父親喪失者」が自らの《ファルス》と錯誤して、性的承認を人格的承認と夢想して信奉し、その代償として性的快楽と父権やモノガミーへの献身すらもたらしてくれるからである。すなわち男性は自己の権力性は問われることなく、性的承認（性的快楽）のみを与えれば言うことを聞く存在へと、「父親喪失者」は自動的にになってしまうからである。

「父親喪失者」は抱え込んだ二重のメランコリーと人格的承認への渴望によって、男性社会にとってもっとも付け込まれやすい存在となっており、男性社会および男性個人は、彼女らの付け込まれやすさに、まさに付け込んでいるのである。『グロテスク』において、娼婦となったユリコ（彼女もまた「父親喪失者」であった）の、「欲

情しなければ、私は存在しない。存在しない私は何か、その先を見据える必要などなかった。私はいつも誰かに欲せられているからだ」(桐野, 2006a: 290) というモノローグは、自己の《ファルス》の鏡像にマスターベーションせざるを得ない「父親喪失者」という存在と、それに付け込んで利益を得ようとするホモソーシャルな男たちとの権力関係を、端的に表現しているといえる。

これらの点を、「父親喪失者」における承認獲得戦略およびアイデンティティの防衛戦略、ならびに男性による「父親喪失者」の資源化戦略という視点からさらに考えてみよう。再度考察するのは、この諸点は「父親喪失者」においてもっとも先鋭化されているものの、すべての女性が程度の差こそあれ直面しているクライシスであり、同時に、多くの男性が女性を植民地化するとき、無意識的にでもそのような状況に女性を追い込む選択を行っているからである。

「父親喪失者」は人格的承認を求めが、それは前述のように与えられない。その結果彼女らは自らのアイデンティティを防衛するシステムを構築しようとする。その1つは人格的承認の不在を性的承認と社会的承認をもって代替的に埋めようとするものである。『グロテスク』において和恵が採用した戦略である。和恵は「売春」の相手に自らの社会的地位を明かし、尊敬の言葉を得ようとしていた。またそのような尊敬の言葉は会社の重役や大学教授といった社会的威信を備えた客からのものであればあるほど、意味を持っていた。すなわち、“真正”な《ファルス》の体現者たる社会的地位・権力を持った男性に選ばれることで、選ばれた自分を特権化しようとする戦略である。そしてこの戦略は、いうまでもなく、そのような男性に付け入る隙を与えることになる。

2つ目の防衛システムは、人格的承認は求めないと自分に言い聞かせることである。すなわち自己だけで世界を閉じようとする戦略である。実際には、あるいは潜在的には切実に他者とのコミュニケーションを求めているにもかかわらず、顕在的には他者への関心を失ったふりをする。すな

わち男性による《ファルス》の侵入を拒否する態度をとる。『グロテスク』における「わたし」がこの戦略を採用していた。世の中で自分は一人との感覚、世の中はすべてが自分とは異質であるという感覚をもち、もっとも人格的承認を求めているのに、人格的承認を拒否することによって、その不在の苦しみを隠蔽しようとする戦略である。

この2つ目の防衛システムは、さらに2つの行動指針をもたらす（そしてそれらは多くの場合並存可能である）。

1つ目の行動指針は、男性からの人格的承認を拒否するために性的承認を防衛システムとして使用する手法である。たとえば不倫のように自分を「肉壺」としか見ない男性との関係が「心地よく」感じられ、決定的な人格的承認の不在を実感する機会そのものを封印しようとする指針である。しかしそれは、前述のように、家父長制と婚姻制度、そして《ファルス》の発動根源であるホモソーシャルリティを維持発展させるという、男性にとって極めて都合のよい存在に自ら転化してゆくことを意味する。

2つ目の行動指針は、人格的承認の価値そのものを切り下げ、自分の存在（そして他者の存在）も無価値で無根拠なものであるとの、一種のニヒリズムを採用することである。すなわち承認の無根拠性を自身の存立基盤とする指針である。『グロテスク』における「わたし」がその典型である。しかし、このような行動指針は必然的に社会性の喪失を帰結する。そして社会性の喪失こそ、典型的な「女という病」の一つに数え上げることが可能な状態である。いうまでもなく、社会性の喪失は人間（他者）への無関心さとなって現れ、ようするに「人をナメた」言動を取りやすくなる。その結果、他者からもそれにふさわしい扱いしか受けられなくなる。そしてそのような貧しいコミュニケーションしか構築できない状態に陥った女性は、いったん《ファルス》による支配を受け入れたならば、人格的、社会的、性的承認のすべてを受け取ったと錯覚しやすくなり、潜在的にもっとも男に支配されやすいパーソナリティを自ら作り上げてゆくことになる。

これら2つの行動指針のいずれを採用しても、最終的にはもっとも男に支配・制御されやすく、家父長制と《ファルス》を支える存在へと自らを追いやってしまうことになる。人格的承認を拒否し無価値とみなす戦略は、いずれにしても男性権力に回収されてしまうのだ。

それは、このような戦略を採用しようとする女性には、とどのつまりは、自分以外の女性には不要だと思っているからでもある。彼女らは実務能力や容姿等によって、あるいは「個性」と自分がみなしているものによって他の女性から屹立した存在になろうと考える。あるいは、人間関係の無根拠性や無価値性を強調する。それらは自らが《ファルス》の体現者になりたいと考えてきたことに起因しているが、じつのところ、自分以外の女性には不要だと思ふことは、「美」や能力によって男性に選ばれるための女性間の競争関係を信奉していることと同義であり、結果的にもっとも強烈に女性性を内面化していることと同義でもあり、もっとも男に利用されやすい女性ということでもある。しかもその孤高さは、実際には、他の女性との比較によってしか担保されていないのである。

そしてこのような防衛戦略がさらに進むと、必然的に彼女らは頭と下半身（性器）のみに自分の存在意義を求めた存在となる。すなわち胴体（＝心）の不在・喪失をうみ出すのである。「他の女性と異質な私」は、実際には他の女性との比較、それも容姿や実務能力といった女性原理や業績原理によって担保されたものにすぎない。そのことは、彼女らにはおそらく潜在的にでも自覚されているだろう。実際には他の女性と自分も変わらない。自分が異質であるとしても、それは人格的な部分ではなく、実務能力や容姿という男性社会の基準においてであることを自覚したとき、「父親喪失者」の空洞化は極大化せざるをえない。他者と変わらない存在なのに、そのことに直面できない恐怖感。なぜ自分にだけ空洞が存在するのか。この状態はメランコリーの極致である。この苦しみは想像を絶するものであろう。

自身の存在意義を見出せず、人格的承認と社会的承認・性的承認の間で引き裂かれる事態。これ

を解決する方法は、そのような空洞と分裂を強いている男性個人および男性社会の《ファルス》を殺すことである。しかしそれは不可能な企てに見えてしまう。その結果、その苦しみから逃れるために、代わりに自分を殺すことになる。すなわち緩慢なる自殺である。このようにして「父親喪失者」は自身を殺し、去勢される。繰り返すが、これらの過程はすべて男性によって準備され、男性社会のホモソーシャルリティの維持のために、女性自身の手を使わせて実行されているのである。そしてこのようにして、支配者と被支配者の奇妙な共犯関係という、植民地主義に遍在する権力関係が、結果的に完成されるのである。

つまり、ホモソーシャルな権力にとっての異者、女性であるにもかかわらず《ファルス》を体現したいと望む女性には、闖入者として殺されるか、結果的に《ファルス》に跪くことを余儀なくされてきたのだ。女であることに違和感を覚えざるをえなかった「父親喪失者」。彼女らは女であることに違和感を覚えたからこそ、ホモソーシャルな権力によって一方的・暴力的に女であるペナルティを課されたのである。それは女であること（＝女であること）を過剰に引き受け、同時に拒否したこと（＝女であることに疑問を感じたこと）に対するペナルティであり、その帰結は究極的には全面的服従か抹殺である。

「父親喪失者」が直面するクライシスは、父親の喪失という彼女ら自身の責任ではない事柄によって選ばれた、ホモソーシャルな権力を維持するための「いけにえ」的な状況であるともいえる。そしてそのような事態はすべての女性に対して発動される《ファルス》の権力の象徴的な作用でもあり、ある種の「みせしめの効果」すら伴って「父親喪失者」ならびにすべての女性をホモソーシャルな権力の維持者、ホモソーシャルリティを下支えする被植民者へと動員するための、男性社会の戦略であるといえる。

#### 4. 可能性

「父親喪失者」は、近代異性愛制度と家父長制

の社会では、もっとも生きにくく、つらい人生を歩むことを運命付けられた存在の一人であろう。その道は険しく、左右には深い谷が口を開けて待っている。滑落者も数知れない。しかし、「父の娘」にしる「父親喪失者」にしる、彼女らを苦しめているロジックは、他の多くの女性にも共有されているものである。そのロジックがもっとも激烈に表出せざるを得ないのが「父親喪失者」であるに過ぎない。

そして先に紹介した吉澤夏子の分類を再度参照するならば、「父の娘」や「父親喪失者」こそがもっとも強固な「存在的女の子」ということになるだろう。とくに「父親喪失者」は、自分の全存在、場合によっては命まで賭けて人格的な自己実現、人格の再構築・再創造を試みる人々であるからだ。ここに彼女らの唯一の可能性があると考える。

彼女らの生きづらさや苦しみは、そのまま新たな存在への可能性へと転化する。じつは《ファルス》への「断念」に一番近い位置にいる女性たちこそ彼女らであるからだ。ファルスに代わる自己の核心、存在論的な〈主体性〉の獲得へ最も近いところにいる女性もまた彼女らなのだ<sup>13)</sup>。もっとも深刻な苦しみは、もっとも輝く希望になりうる。

とはいえ、長年《ファルス》を追い求めてきた彼女らの志向性は、ホモソーシャルな誘惑とつねに隣り合わせでもある。彼女らが求めてきたのは、自分自身を人格をもった個人として再定義することである。それは男性間においてはホモソーシャルな関係としてすでに獲得されてきた。そうした場合、《ファルス》を経由した強引な承認、すなわち「男と同等になり、ホモソーシャルな関係性に参入すること」への誘惑は、つねに付きまとうであろう。たとえそれが構造的に達成可能かどうかは別としてもである。しかし、その誘惑が外部者としての女性に支持され、欲望されるかぎり、ホモソーシャルな体制は安泰なことも確かなのである。

そのように考えた際、基本的な方向性が明らかになる。それは、最終的な目標として、近代社会

のホモソーシャルリティを解体することである。その過程で彼女らの《ファルス》願望も解体される必要がある。そもそも、彼女らに人格的承認における未達成感を植え付け、それを与えず「父の娘」等に追い込んだのも、男性たちに共有されている「ホモソーシャルな女性の資源化への欲望」にほかならないのだから。

このような男性支配から逃れるためには、彼女らの内部において、《ファルス》の不在によって空洞化した人格的承認と人格的自己実現のための契機を再構築することが必要である。それは言語的に達成されなければならない。と同時に、「ペニス中心的（ファロゴサントリック）であった《ファルス》への集約」を排除した性（性愛）のあり方も模索されなければならない。なぜなら、現実には、すでに性（性愛）は存在し、無視することはできないものだからである。それを無視するなら「《ファルス》集約型」の性愛の回路は無傷で残り、いつ何時ホモソーシャルな暴力によって再起動・再稼働されるかわからないからである。そのような回路を作り変える作業は必須である。これは個人の“身体（あるいは性的身体）”と呼ばれる領域においても、あるいは社会に共有される性愛のコードにおいても、その双方において必要なことである。

その際には、男性の意識と身体の変革が現実的には必要不可欠である。「現実的には」と断ったのは、理論的には男性の存在を無視して女性だけでも達成可能であるかもしれないからだ。その可能性は、バトラー（Butler, 1990 = 1999 ; 2000 = 2002）やイリガライ（Irigaray, 1977 = 1987）、デ・ラウレティス（De Lauretis, 1994）らによって理論化が試みられてきたし、一つの可能性として追求されるべきであろう。しかしながら、これまた男性は現に存在しているし、多くの異性愛のセクシュアリティを内面化した女性たちにとっても、異性愛の男を性的なパートナーとする機会が消滅することはないだろうからである。

その変革への契機は、まず第1に性愛から権力関係を排除すること。権力の契機を極力排除した性関係のあり方を模索することである。

第2に、男性が与える社会的承認と性的承認のリンクを断ち切り、新たに人格的承認と性的承認を結びつける回路を追加することである。すなわち、社会的承認、人格的承認、性的承認の3つを、相互に独立させ、同時にいかなる組み合わせも可能にすることが必要である。

第3に、そのような男性の性愛の形と、女性の性愛の形を作り出すことである。

第4に、そのような男性の身体と、女性の身体を作り出すことである。

これらはいずれも男性の変化なくしては達成し得ないことである。これを男性側から再構成するならば、男性が自らの行動と身体に刻印してきた「性の植民地主義」の主体性を解体することを意味する。

そのような作業の後、女性は（そして男性も）、他者承認に頼らず、自分の基準で自分を評価し充足する自己承認を獲得できるだろう。そして承認に依存せず、しかも支えあうことが可能な新たな人間の関係性を模索することができるはずである。それは性愛を排除するのではなく、性愛の位置づけと権力関係上の意味を変革することでもある。権力による支配と従属の関係ではなく、共感を基盤とした尊厳と承認の関係。そのような新たな関係性を、言語と性愛の両方の局面において模索することが必要であると思われる。

このような企ては、無謀なものであろうか？

このような《愛》を夢想することは、荒唐無稽であろうか？

しかしながら、フーコー以降のセクシュアリティ研究は、〈われわれ〉の想像を超えたセクシュアリティの可変性を明らかにしてきたし、それ以上に可変的で推移の早いセクシュアリティへの意識や情報のあり方を明らかにしてきた。ラディカル・フェミニズム以降問題とされてきた性支配。その絡まった糸を解きほぐす道具は揃いつつある。その作業を通じてしか、身体と制度に刻印された男性権力の植民地主義は解体できないの

である。

とはいっても、あまりに大きな問題ではある。そういうときには歴史を参照することが有効となる。本稿はあくまでも「基礎的考察」であったため、モノガミーとセクシュアリティにおける男性権力解体の契機について論じることはできなかったが、失敗例も含めて、歴史を参照し、その契機とロジックを探ることが次の段階の具体的な課題となるだろう。

## 注

- 1) 植民地主義は植民地に存在するのみならず、時代や地域を超えて遍在している。ここでは、植民地主義を「他者を資源化して自らが利益を得ること」あるいは「他者を資源化して自らが利益を得ることへの鈍感さ」と、支配と権力関係における心的傾向として柔軟に定義しておきたい。この植民地主義という概念の汎用性については、池田（2005a；2005b）において集中的に論じたので、参照されたい。
- 2) 学生から頻繁に受ける質問として、モノガミーの対立概念は何か、というものがある。ポリガミー（多重婚）ではないことは確かである。ポリガミーも制度である点はモノガミーと等価であるし、モノガミーは同時にいくつも並立可能であり、愛人制度や不倫といった“愛の制度”も、モノガミーを補強しこぞすれ破壊することはないからである。強いて言えばモノガミーの対立概念として一番近いものは「自立」であろうが、本稿では紙幅の関係でこれ以上の議論には立ち入らない。稿を改めて論じたい。
- 3) 本稿では、基本的に異性愛における男女間の他者承認を問題とする。それは他者承認を介在した男性権力を分析するのが本稿の主題だからである。同性間の承認については稿を改めて考えたい。
- 4) また吉澤は、女性は女を売らずに一瞬たりと

も生きていくことはできないという状況に気づいて、しかしその状況全体を相対化しようとする志向性に思い及ばないとき「戦略的女の子」になるが、その状況を相対化する志向性を少しでももったとき、恋愛体験を摺り抜けるのではなく、恋愛体験を引き受ける選択、すなわち〈女の子〉であることを知りつつ〈女の子〉になりきれないという生き方をせざるをえなくなる。それは相手の（あるいは自分の〈女の子〉としての）代替不可能性を確信するという危険な賭けであり、そのような体験は日常的に得られるものではなく、一生得られないかもしれず、そうなれば恋愛という体験が得られなかっただけではなく、〈女の子〉としての特権（楽して得する）も享受できない、という危機感の下におかれると論じている（吉澤，1993：208-209）。それが「つらい経験を重ね」ることの直接・間接の原因となると解釈してよいだろう。

- 5) これらの諸論点については、池田（2004；2007）の2つの論文にまとめたので参照されたい。
- 6) 実際、「東電OL」も慶應義塾大学出身であった。
- 7) これらのフロイト理論とその後の歴史的展開については、竹村（2003）および河野（2003）を参照した。
- 8) ちなみに、ラカンの議論とバトラーの議論では、ラカンの議論のほうが先である。したがってラカンはバトラーが指摘した女兒のメランコリーを念頭においてファルスを提唱したわけではない。むしろラカンのファルス論もまた男児を中心に仮定した男性中心的なものであったとの批判を、（当のバトラーから）受けている。
- 9) 田嶋陽子はギリシャ神話のエディプスに対応するエレクトラのように、父権を内面化し、「母」を殺し、家父長制に殉ずる「娘」を「父の娘」と定義した。そのような「父の娘」は父権によって去勢された存在であり、婚姻制度によって母になったとき、立場の弱い

「母」の地位を引き受けざるを得なくなる、という（田嶋，1993：189-196）。すなわち「父の娘」は、家父長制によって創出された、「もっとも去勢された存在」であり、「父の娘」の存在は女性同士の連帯を阻害し（「娘」の時には母を軽蔑しているから）、長じて母となつては「去勢された母」となる。「父の娘」と「去勢された母」は相互補完的でお互いを再生産するのである。

本稿では、このような田嶋の概念を援用しつつ、近年の晩婚化・非婚化や女性の社会進出を踏まえて、長い「父の娘」の時代を過ぎさねばならず、あるいは永遠に「去勢された母」にはならないかもしれない存在。そして、父権性の支持者であるだけでなく、家父長制的価値観を内面化しているがゆえに、社会的権力を手にして「男のように生きる／男として生きる」ことを目指す女性も「父の娘」という言葉で表現したい。

なおここで書いた、「男のように生きる／男として生きる」ことを目指すことは、一見、抑圧された女性の状況からの自由を目指すことにも思われるが、それはあくまでも家父長制の価値観に支配されたものであり、家父長制の存続を支えるものであり、男性への羨望と女性嫌悪とが一体となったものであることを強調しておきたい。

- 10) 文脈から当然のことであるが、この「父親喪失者」はあくまでも「父の娘」であり、かつ「父親を喪失」した女性の意味である。それ以外のケースは含んでいない概念であることを強調しておく。
- 11) 繰り返すが、モノガミーは同時に複数並立しうる。それは婚姻制度の補完制度としてのかつての愛人制度（次世代再生産の制度的保障）という意味に留まらない。広義のモノガミーが、女性にとって性的回路を通じた他者承認（男性に選ばれること）であり、男性にとっては性的回路を通じたホモソーシャルな権力の発動の場（女性の獲得による男性間での優位性の確保）であるかぎり、そしてそれ

らが対の関係において排他的に承認を交換するものであるかぎり、特定の対関係は、たとえばそれ自体は排他的であったとしても、性的回路を通じた承認への欲望が存在するかぎりにおいては、他の対関係の可能性を排除しないのである。

とくに根本的に人格承認をもっとも強く渴望している「父親喪失者」の場合、性的承認とセットになっている社会的承認によってはその欲望を埋め合わせることは、論理的にも不可能である。その結果、多くの「父親喪失者」は1つのモノガミー関係では充足されず、また彼女らは女性であるため性的回路しか他者承認の方法を想像できないために、さらに他のモノガミー関係を手に入れれば人格承認が満たされるのではないかとの錯覚に陥り、同時複数的なモノガミー関係を結びやすくなるのである。しかし、そうやって求めた複数の対関係も、彼女らが選ぶ相手が男性の価値観を強く内面化した相手であるため（なぜなら、もっとも安易に《ファルス》を篡奪可能であるとみえる相手であるため）、たとえいくつもの対関係を作っても、構造的に人格的承認が得られることはない。彼女らにはつねに未達成感がつきまとい、さらに複数のモノガミー関係を求めるという循環に陥りやすいのである。

- 12) 多くの人は、言語によって様々な体系を構築し、意図的な言語の誤用によって他者あるいは自分自身をも錯誤に導くが、行動においては驚くほど論理的で正直である。不倫の場合（最終的には家族を優先する）はまさにその典型であるといえる。この意味で、不倫をしている女性の多くが最も激昂する局面が、相手の男性の妻ではなく相手の子供の影を感じ取った時であるといわれるのは示唆的である。
- 13) もちろんここでいう〈主体性〉とは、近代かつ固定的な大文字の「SUBJECT」を指すのではない。バトラーらが主張する Agency の模倣の可能性も含めた「主体-〈性〉」で

ある。

#### 参考文献一覧

- Butler, Judith 1990 *Gender Trouble : Feminism and the Subversion of Identity*, Routledge, (竹村和子訳 1999『ジェンダー・トラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社)
- Butler, Judith 2000 *Antigone's Claim : Kinship Between Life and Death*, Columbia University Press, (竹村和子訳 2002『アンティゴネーの主張—問い直される親族関係』青土社)
- Chodrow, Nancy, 1978 *The Reproduction of Mothering : Psychoanalysis and the Sociology of Gender*, University of California Press, (大塚光子・大内菅子訳 1981『母親業の再生産—性差別の心理・社会的基盤』新曜社)
- De Lauretis, Teresa 1994 *The Practice of Love : Lesbian Sexuality and Perverse Desire*, Indiana University Press
- Dworkin, Andrea 1987 *Intercourse*, The Free Press, (寺沢みずほ訳 1989『インターコース—性的行為の政治学』青土社)
- Friedan, Betty 1963 *The Feminine Mystique*, W. W. Norton, (三浦富美子訳 1965『新しい女性の創造』大和書房)
- 藤本 由香里 (白藤花夜子) 1999『快樂電流』河出書房新社
- 本田 透 2005『電波男』三オブックス
- 池田 緑 2003「男性言説をめぐるポリティックス」『社会情報学研究 (大妻女子大学紀要—社会情報系—)』12: 17-38
- 池田 緑 2004「“男女共同参画”とその社会的言説—産業社会と寛容さをめぐって—」『社会情報学研究 (大妻女子大学紀要—社会情報系—)』13: 9-23
- 池田 緑 2005a「心的傾向としての植民地主義—植民地主義をめぐる基礎的考察 I—」『社会

- 情報学研究 (大妻女子大学紀要—社会情報系—)』14:55-77
- 池田 緑 2005b 「平等, 寛容, 想像力, そして植民地主義—植民地主義をめぐる基礎的考察II—」『社会情報学研究 (大妻女子大学紀要—社会情報系—)』14:79-99
- 池田 緑 2006 「おばけは生まれ変わることができるか?—植民地主義をめぐる基礎的考察III—」『社会情報学研究 (大妻女子大学紀要—社会情報系—)』15:15-38
- 池田 緑 2007 「男女共同参画の物憂いため息—労働と選択の視点から—」『社会情報学研究 (大妻女子大学紀要—社会情報系—)』16:49-66
- Irigaray, Luce 1977 *Ce sexe qui n'en est pas un, Minuit* (棚沢直子・小野ゆり子・中嶋公子訳1987『ひとつではない女の性』勁草書房)
- 桐野 夏生 2006a 『グロテスク(上)』文春文庫
- 桐野 夏生 2006b 『グロテスク(下)』文春文庫
- 河野 貴代美 2003 「精神分析/エディプス・コンプレックス/前エディプス期/対象関係論/メランコリー理論」竹村和子編『“ポスト”フェミニズム』作品社:200-201
- Kristeva, Julia 1989 *Soleil Noir: Dépression et mélancholie, French & European Pubns* (西川直子訳 1994『黒い太陽—抑圧とメランコリー』せりか書房)
- Millett, Kate 1970 *Sexual Politics, Doubleday*, (藤枝滂子・加地永都子・滝沢海南子・横山貞子訳 1984『性の政治学』ドメス出版)
- 中村 うさぎ 2005 『愚者の道』角川書店
- 中村 うさぎ 2006 『私という病』新潮社
- 野村 浩也 2005 『無意識の植民地主義—日本人の米軍基地と沖縄人』御茶の水書房
- 小倉 千加子 2001 『セクシュアリティの心理学』有斐閣選書
- 小倉 千加子 2007 『結婚の条件』朝日文庫
- 小倉 千加子・中村 うさぎ 2006 『幸福論』岩波書店
- Sedgwick, Eve. K 1985 *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*, Columbia University Press, (上原早苗・亀澤美由紀訳 2001『男同士の絆—イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会)
- 田嶋 陽子 1993 『もう、「女」はやってられない』講談社
- 竹村 和子 2002 『愛について—アイデンティティと欲望の政治学』岩波書店
- 竹村 和子 2003 「「いまを生きる」“ポスト”フェミニズム理論」竹村和子編『“ポスト”フェミニズム』作品社:106-117
- 上野 千鶴子 1995 「対幻想論」井上輝子・上野千鶴子・江原由美子編『日本のフェミニズム⑥:セクシュアリティ』岩波書店 上野千鶴子・小倉千加子:41-53
- 上野 千鶴子・小倉 千加子 2002 『ザ・フェミニズム』筑摩書房
- 上野 千鶴子・小倉 千加子・富岡 多恵子 1992 『男流文学論』筑摩書房
- 吉本 隆明 1972 『改訂新版共同幻想論』角川文庫
- 吉澤 夏子 1993 『フェミニズムという困難—どういふ社会が平等な社会か』勁草書房
- 吉澤 夏子 1997 『女であることの希望—ラディカル・フェミニズムの向こう側』勁草書房

## **Male's Power in Politics of Recognition : Basic Consideration to Colonialism of Monogamy and Sexual Love**

MIDORI IKEDA

*School of Social Information Studies, Otsuma Women's University*

### **Abstract**

In the colonialism between men and women, the woman is squeezed in unpaid work and next generation reproduction. Other recognition is given to women as the counter-value. However, such recognition is sexual recognition or social recognition, it is not the personal recognition which the woman wants. As a result, women are torn between a principles of competition and feminine principles.

On the other hand, the recognition of “Phallus” has deprived the woman of self-determination through melancholy. It is type “a father’s daughter” or “a daughter loss of father”. In order to change this situation, re-mapping of sexual recognition, social recognition, and personal recognition, and groping of human relations which can share the technique of new sexual love with respect will be required.

### **Key Words** (キーワード)

gender (ジェンダー), politics of recognition (承認の政治), sexual love (性愛), homo-sociality (ホモソーシャルティ), misogyny (ミソジニー), other recognition (他者承認), sexual recognition (性的承認), social recognition (社会的承認), personal recognition (人格的承認), “Grotesque”(『グロテスク』), melancholy (メランコリー), phallus (ファルス), father’s daughter (父の娘), daughter loss of father (父親喪失者)